

丹波與作

近松門左衛門作

上之卷

大名に云々―大名に生るゝ子は自然に何萬石と何萬人に敬はる也
お湯殿―浴室に奉仕する召使女
お國腹―丹波で生れたる子
金水引―金色の水引にて髪を結ふ
おさし―乳母、乳を上るもの
中老―老女の次
研山―下に繪を書き上に漆を磨き下下の繪を願したるもの
金襴鶴蒸―以下

大名に生るゝ種の一粒が、何萬石ぞ幾萬人、腹の中からうやまひて、持囃したる舌つどみ、丹波の國の一城主、由留木殿のお湯殿の子、しらべの姫はお國腹、金水引の初元結、まだ十歳の襦袢もすらりとしたる生れ付、東の高家入間殿より御養子分の約束にて、蕾からとる花嫁子、御迎ひの諸侍、五千石を頭にて、騎馬が甘騎稚兒醫者は御輿つき、大上臈小上臈、おさし抱き乳母御乳の人、中老下らうの供乗物、またもの駕はいろは付、以上四百八十挺金銀瑪瑙枝さごじゆ、研出し蒔繪の長柄の笠、長刀袋傘袋、時代の金襴、鶴ひし、たすき花うさぎ、窠に霰大内ぎり、覆ひかけたる挾箱、濃紅の大紐を高、高と結びしは盛の牡丹に異らず、臺所荷は次傳馬、おつどら荷物は通し馬、三十駄の馬、方の小歌がなつて小奇麗な、聲のよいのをすぐられしも金にあかせし吟味なり、刻限は

大内桐迄百袋の
きれの名

おさへーまんが
り

あらしこー雑兵

おぢやんべいー
ありませう

がうぎがさつー
我儘粗暴

又とさーとさは
助辭

濁ー色事

赤前垂ー隠枝を
いふ

空頭ー人足頭

おむづかりーお
願立

已の上刻との定にて、御迎ひの奥家老本田彌三左衛門、數獻の盃足元はよろくと、
猩々緋の道中羽織、白い所は髪ばかり、きんか頭に顔色も、しゆちんの裁著りよしけに、
「何とく、御供廻りが揃つたら、お先手から乗出めされ。是は文左源五左、身はおさへ
を乗申。萬事夜前申渡す通りだ。若黨仲間あらしこ小者に至るまで、大酒を致さぬ様に、
馬次舟渡し等にて、がうぎがさつを仕つたらば曲事でおぢやんべい。又とさ、とまり
とまりの赤前垂にしやらくら致さない様に、第一お乗物の先で見苦しい。去ながらとさ。
永の道中下々が退屈致すべし。若濡などを企つるとも、目だよぬ様に物陰へよつて、ち
よこくちよく濡たがよくおんじやる。目出度い折からと申、殊に女中のお供だ、
少々事は見免しにして置召されつちや」「あつ」と答へて宰領ども、「サア御立」と催す
所に奥より女中聲々に、「ア、待つしやれく。氣の毒やお嬢様、關東へ往く事は、いや
じやくとやんちやばかり御意なされ、お袋様も殿様もたらしつ吐つ遊ばせ共、どふ
でもないやじやおむづかり、お乳の人の滋野井殿色々申されても、夫程江戸へ往きた
くは乳母ばかり往きをれ、とお乳の人の背中をとんくと打しやんして、御機嫌が損ね
ました」と云ふ所へ、眉泣きはがし姫君は、「江戸も東もこちやいやじや、己は往かぬ」

山も見えざる云
 云一松の落葉五
 巻にゐる唄

琴の組一組歌、
 意味の違つた歌
 を幾個も續けし
 もの
 どうでも—どう
 しても
 てんがう—いた
 づら
 てこのぼう—人
 形、でく

と泣くく、走り出給へば、侍衆も下々も御門に駈出、家老の外男ぎれこそなかりけれ。
 お乳の人数を變へ、「是申御姫様、下々の子供さへ九ツ十では物の聞分御座ります。あれ
 見さんせ、百里彼方の山川越て白髪かついた家老殿、皆歴々の侍衆が迎ひませに參つ
 て、江戸へ御座れば入間殿の惣領嫁子と、かしづかれるお身じやぞや。お乳の養育の難
 になれば、女でこそあれ乳母は腹を切らねばならぬ。サアよいお子じや、お輿に召せ」
 と、威してもそやしても、無「いやく、皆の欺しじや、何の吾妻が能い所。腰本共が諺
 ふを聞きや。サアみんな爰へ出て、いつもの歌を諺へく」とせめ給へば、お伽小姓の
 玩是なし十二三なが手を揃へ、歌「山も見へざるかりそめに江戸三がいへ往んして、いつ
 戻らんす事じややら、殺して置いて往かんせの。放ちは遣じと泣きければ「アおきやく、
 お大名の宮仕、琴のくみでも諺はひで、誰に習ふてはでな歌、姫様などに教やんな。必
 おいてもらはふ」とお乳の人の不機嫌さ。本田も餘り詮方なく、「申お姫様、あれは人の
 口てんがう。花のお江戸は京優り、淺草上野の花盛、又堺町木挽町の、てんつくく」で
 このほう、辨慶や公平が、ゑいやつととゑなどと切合を見せませふ。道中の面白い事
 富士の山と申、天までとどく山を御目にかけます。サアお輿に召ませいと、力一ぱい

ちつばけー小さ
い

丁稚ー小僧

あり様ーも前さ
かけどくー賭事
なんでやるー何
でござる
はれやれ云々ー
馬方の套語にて
語尾につけてい
ふ迄
つかふどーぞん
ざい
船頭馬方も乳の
人一人の悪きも
のを並べたる話
一代若衆云々ー

賺しても、態「いや〜江戸へは往きはせぬ。どうでもいやじや」と泣き給へは、お乳も今はあぐみはて、どうして能らふ御家老も、あきれてこそは居られけれ。お仲居の若菜は旅出立に、菅笠持て門外より走り入り、「なふお乳の人様、面白い事が御座ります。十計の剃下のちつほけな馬方が、道中双六とやら、東海道の繪をひろけ、あちな事して遊びます。御機嫌なをしにお目かけなされませ」蕪ヲ、〜よふぞ氣がついた。夫は聞およふだ道中の繪を見せまし、お心も移るため馬子でも子共は大事ない、お許しじやその丁稚に、持て參れと呼ふでおじや」蕪「心得ました」と御門に出、連立來たる馬方が、片肌ぬいでさばきがみ、御前近くも無遠慮に、縁先にあけ足して、「やれ〜〜あり様達は、あつたほこしゆもない。傍輩共とかけどくに道中双六打て、沓の錢程してこませふと思ふたに、人呼廻つてなんでやる。はれやれ〜〜きり〜乗つしやれ、馬やろい」とぞつかふど成。蕪扱々利口な野郎じやな。船頭馬方お乳の人、此方もそちらとおなじこと。して年は幾歳、名は何と云ふぞ」馬年は今年十一、五つの歳から馬追ふて一代若衆にならずに、はへぬきの念者じや。所で名はじねんじよの三吉」蕪扱もよい名じや。聞ば道中双六が有けな。腰本衆もうつて見や、姫様も遊ばせ。サア三吉も爰へ來い、

男色にて兄弟分を
念者弟分を若衆
といふ
そぐはぬ一ツリ
おはぬ

はるしる云々
馬追ふ詞のハ
牛、シ牛、ドウ
に道中をかく
南無諸佛分身
當時双六の骰子
に此六字を刻み
しなり
どさくさ一混雑
船一水口の名物
船は踊り上るも
の故にけたり

手判一處の名主
五人組の旅行券

苦しうない」と呼びければ、「『あい』と云ふより慮外をも、かへりみじかき煙管の煙り
立交りたる女中の傍、そぐはぬ様に見へざるは、さすが童の一徳と、繪を取出し双六を
皆打交り遊ばるよ。

道中双六

これく御覽ぜうたしやんせ。是こそ五十三次を、居ながら歩むひざ、ひざくりけ馬。
はるしる道中双六、南無諸佛ぶんしんと、書いた六字を六角の、さいは櫻木花の都をま、
ん中に、思ひくくのしるしを置いて、さらば此方から打出の濱、大津へ三里爰で矢橋の舟
賃が、出舟召せく旅人の、乗おくれじとどさ草津、お姫様より先姥が餅、一口二口み
な口 船 踊りこへ、坂へ越すのもさい次第。さいをふれく、ふるや鈴鹿を跡に下れば
負まいと、せきにせきより龜山に、煙草火うちの石薬師、おつと桑名の舟渡し、宮へ上れ
ば池鯉鮒へ四里の、宿にころりは歌岡崎女郎しゆと、岡崎女郎しゆと、もつれ寝よや
れ藤川に、思ひくくの君待受て、解く前垂の赤坂や、吉田二川 歌白須賀ちよいと越て、
手はん御座るか振袖に、ヤ此この荒居今ぎれ、舟に召せく、蛤召の蛤々、濱松までま

日阪一にツと突
ひにかく
よどみ逗留
十圍子一名物に
て一拘に十宛入
て客に出す(足
新翁記)

沼津一鰻のぬめ
りにかく

ういらう一透頂
香といふ薬
とつかは戸塚
に急忙の意をか
く
一の裏一假子の
一の裏は六なれ
ばかけたり

へ坂三里ナ、馴染見附の泊りと聞ば、誰も惜まぬ島の財布の袋井や、のり掛川を飛おりて、
機嫌笑顔やサアにつ坂の蘇餅、腰なは何ぞ日本一の大井川。さいに無の字を打出せば、
水の出ばなの八十川の、島田金谷に二日のよどみ、仕合よしの旅すご六里、七里八里も
たど一足に、さきへくと咲かよりたる、藤枝岡部瀬戸のそめ飯、うつの山邊のとうだ
んど、所々の名物買ふて、おあしつくつく手鞠子に、ひいふうみいよ、ふちう江尻
にすつとんく、とんと打たる興津なみ、松原はるゝ膏藥買ふて、月をすひ出せ清見寺、
由井蒲原や吉原の、花の蒲燒名物の、鰻のはだへぬまづの宿、三島こゆれば箱根へ三里、
さい目次第にせきこゆる。悪い目うてば手はんをとりに、元の京へ立歸る。がつてんか
ヲ、のみこんだ。小田原ういらう大磯平塚藤澤の、さはりもなしに双六の、さいさきさ
よし門出よし、道中早めてとつかはと、急ぐ程が谷神奈川こへ、川崎をこへ品川こへ、ま
づ先駈のお姫様、一番勝に勝色の花のお江戸に著き給ふ。一のうらは双六の、幸あり
喜あり、慰み有ける道中と、どつと興にぞ入給ふ。
お傍の衆に囃されて、幼稚心の姫君、「斯う面白い東とは、今迄おれは知らなんだ。サ
アサア往ふはや往ふ」蕪ヤア御座らふとおつしやるか、そりや目出度はく。又もや御

ざやうに―馬鹿
に
大高―檀紙

ぶんかう―菓子
人
けな者―殊勝な
者
三筋―三百文

番頭―隊長

意の變らぬ間に、行列揃へ」と立騒ぐ。お乳の人は勇をなし、「左様ならま一度大殿様、お袋様とお盃。是も馬子殿おかけじや、出來いたく。其方には禮いふ褒美やる。其處に待やや」ととざよめき渡り、奥に御供し入にけり。馬方は遂に見ぬ金の間を、うそ／＼と覗き廻れど、筵の外踏もならはぬ備後表。三エ、此座敷はぎやうに滑つて歩かれぬ。大名の家よりも此方の内がけつこで御座る」と、獨言して居たりけり。お乳の人は大高にお菓子さま／＼ぶんかうに盛入、「どれ／＼三吉其處にか。まあ／＼其方はけな者じや。道中双六お目かけ、夫故に姫君様お江戸へ御座ろと御意なさるよ。お上にも御機嫌。これは御前のお菓子難有ふいたときや。お錢三筋買いたい物買やや。殊に其方は通しじやけな。道中すがらも用あらば、お乳の人の滋野井に逢ふといや。見れば見る程よい子じやに、馬方させる親の身は、能々で有ふ」と最念比の詞の末、三吉つく／＼聞すまし、「由留木殿の御内お乳の人の滋野井様とはお前か。そんなら己が母様」と抱きつけば、「ア、こは慮外な。おのれが母様とは馬方の子は持たぬ」と、もぎ放せばむしやぶり付、引のくれば繩り付、三なんの無い事申ませふ。わしが親はお前の昔の連合、此御家中にて番頭伊達の與作、其子は私、此方様の腹から出た、與之介はわしじやはいの。父

おる覺へーうす
おぼえ

馬借—馬を賃す
所

沓打—馬の沓を
作る

様は殿様のお氣に違ふて、國をお出なされたは三ツの時でおる覺へ。沓掛の姥が咄しに
は、母様も離別とやらで殿様に御奉公。此方を姥が養育し、父様に逢せたふ思へども甲
斐もない。母様の細工の守袋を證據に、由留木殿のお乳の人、滋野井様と尋ねよ、と
念比に教へて、姥はおれが五ツの年、久しう疲を煩らふて、あけくに烏羽の祭禮に往て、
餅が咽につまつて、つる死んでのけました。在所の衆がやしなひて、漸馬を追ならひ、
今は近江の石部の馬借に奉公します。是守袋を見さしやんせ、何の虚を申ませふ。
お前の子に紛れはない。外に望みは何にもない、父様を尋ね出し、一日成共三人一所に
居て下され。みごと沓も打ます。此草鞋も私が作つた。晝は馬を追ふて夜るは沓打草
鞋作り、父様母様養ひませふ。父様と一つに居て下され、拜みます母様」と取付抱付
泣居たり。お乳ははつと氣も亂れ、見れば見る程我子の與之介、守袋も覺へ有。飛付て
懐に抱き入たく氣はせけ共、アツア大事の御奉公、養ひ君のお名の疵、許つて叱らふ
か。イヤ可愛けにさうも成まい。まあちよつと抱たい。ア、どふせふ、と百千色の愛涙
双つの眼にはたもちかね、咽び沈みて居たりしが、いや／＼我子ながらも賢しい者、詐
つて誠とせず。母を心のきたない者と、さけしまるゝも情なし。譯を語つて合點させ、

恥しめて返さん物、と涙のごふて氣をしづめ、「爰へ來い與之介」と、引寄て兩手を取、
「扱も大きうなりやつたの。逆も成人せふならば、侍らしう何故じんじやうにも育ぬぞ。
顔の道具手足迄、母は斯うは産付ぬ。美しい黒髪を、此やうに剃下て、手足は山のこけ
猿じや。ほんに氏より育ちぞ」と、又さめぐくと泣けるが、「これ物をがてんしや。腹か
ら産だはうんだれ共、今では子でも母でもない。淺ましう成さがつたを嫌ふて云ではさ
らくない。爰の譯をよふ聞きやや。かゝはもと御前様の奉公人、與作殿は奥小姓、た
がひに若氣の戀風に、すれつもつれつ一夜が二夜と度重なり、通はせ文をお次に落し、
小姓目附に拾はれ、武家の作法と云ふ内に、殊にお家は御法度きびしく、御家老衆の評定、
父も母も御成敗と極りしを、御前様のお身にかへお命かけての御訴訟。殿様の御慈悲に
て科を許され、其上に表だつて夫婦になされ、與作殿は段々に、そゝ者役番頭千三百石
迄お取立、追腹程の御恩の家、其間に其方を設け、上には姫様御誕生、御内證のよしみ
にて、かゝが乳を上まし、首尾さへよければ、其方も今家老衆の子同然に、二番と下座
に下らぬ人。情なや父様が江戸詰の三谷通ひ、大事の所を仕損ない、又切腹に極つた。
なれども腹を切せては、女房お家に置れぬ、時には、大事のお姫様の乳離れ、御病氣も

奏者役一殿へ執
次ぎの役
追腹一殉死

三谷一吉原

改易一祿を取上
げ籍を削らるゝ
刑

男の子云々一男
は親の罰を受繼
ぐ

出ればいかどとて、母を其儘残さふため、父様の命助かり、奉公構ひの御改易。其時母も一所に退けば、尤も夫婦の道はたつ。お姫様の乳離れ、お苦みをかけまし、身に餘つたお家の御恩、誰がいつの世に報ぜん。残つて御恩を報じてくれ、と父様のことはりゆへ、第一は男のため、夫婦の義理を忠義にかへて、あかぬ離別をしたはいの。男の子は幼ふても、御勘氣の末氣遣ひな。與作が子とばし云やんなや。サア早ふ御門へ出や。ア、いかなる因果な生れ性、現在我子に馬追させ、男の行衛も知らぬ身が、母は衣裳を著飾つて、お乳の人よお局よと、玉の輿にのつたとて、是が何に成事」と、聲を忍びに泣く計。子は生れ付賢くて聞分有程猶泣入、三悲しい咄を聞きました。去ながら常に姥が申たは、姫君様と私とは乳兄弟の事なれば、母様にさへ逢ふたらば、父様も出世なさるよ由、御訴訟なされ下されかし」と、いへばちやつと口を押へ、「ア、く、勿躰ない、その乳兄弟云はぬ事。姫君様は關東へ養子嫁子にお下り、高いもひくいも姫御前は大事のもの、先は他人の世間てい、三吉と云ふ馬追が乳兄弟に有などと、どふ妨にならふやら、蟻の穴から堤も崩れる。軽い様で重い事。ひそく云ふて人も聞かぬ。先早ふ出てくれ」と泣くく云へば三吉、「ア、母様あんまり遠慮過りました。先云ふて見て下され」と「ア、ま

まつべてーまと
めて

いたくしー憐
むべし

たしなみー用意

だ云ひ居るか聞分ない。夫の事我子の事、母に如才が有物か。合點の悪い聞分ない」と制する内に奥よりも、「お乳の人はどこにぞ、御前から召ます」と呼ばれば、「あれ聞きや、人が来る。出てたも」と手を取て引出す。不便や三吉しくく涙、頬冠して目をかくし、沓見まつべて腰に付、見すほらしけな後影、「こりやま一度こちらむきや。山川で怪我しやんな。雨風雪ふり夜道には、腹が痛いと作病おこし。二日も三日も休んで煩はぬ様にしてたも。毒な物喰すに腹や癩疹の用心しや。可愛のなりやいたくしや。千三百石の代取が何の罰ぞ咎ぞ」と、式代の段ばこに身を投伏して歎きしが、懐中の有合壹歩十三服紗につよみ、「是たしなみに持て居や」と、涙ながらに渡さるよ。三吉見返り恨めしげに、「母でも子でもないならば、病ふと死ふといらぬおかまひ。其一步もいらぬ。馬方こそすれ伊達の興作が惣領じや。母様でもない他人に金曜はふ管がない。エ、胴慾な母様覺へて居さつしやれ」と、わつと泣出す其有様、母は魂消入て、「養ひ君お家の御恩思はずば、扱一人子を手放して、なんの遣ふぞ。奉公の身の淺ましや」と、悶へこがれて歎きける。時に奥口ざよめいて「早御立」と姫君の、御興昇あけ行列立、お乳の人の乗物をひら付にこそ昇寄けれ。お乳はさあらぬ顔つきして、「姫君のお伽に最前の馬

ぎどつなく一愛
想なく
坂はてるく一
此頃松の杉葉巻
四にあり

しやんく一チ
ヤンと拂いてみ
る
あかつき一曉と
垢つき
振袖一若い女
つめ一年増
庄野一爲やうに
かく
しやらくさつ一
しやちくさいと
草津とかく
同じね一音と直
段とかく

方を此乗物に引付、お慰みに諂はしや「畏つた」と宰領ども「こりや、其處なじねんじよめ、諂ひ居らふ」とぎどつなく、「ヤア此奴はほへをるか何じやこりや忌々し」と、握り拳を二ツ三ツ、いたどきながら泣聲に、「三坂はてるく一鈴鹿はくもる、土山あひの、あひの土山雨がふる」ふる雨よりも親子の涙、中にしぐるよ三重雨やどり

中之巻

留者これ泊りじやないかゑ、泊りなら泊らんせ。泊らんせく、旅籠安ふて泊めませふ。上旅籠中旅籠、お望み次第すき次第、櫛家具も奇麗な、座敷は此夏表がへ、寢道具よふて酒よふて、お茶は上々木賃で成と。据風呂もしやんく、かより湯取てかけん見て、旅の汚れのあかつきは、七つ立か八つ立か、枕のお伽が御用ならば、振袖成とつめ成と足さすつて腰打て、吸付煙草のきせるのがんくび、首筋もとからぞつと庄野の六藏でないか。よい女郎衆乗しやつて、足本がかるいの「六」をいたもア、しやら」留者くさつの三介三藏、石部金吉泊りならとめてたも。なんほ先へ行んしても旅籠屋は皆ひとつ、同じねを啼く鶯の、春はござれの伊勢衆でないか。目本にしほがこほれる。爰へ見へる

紙子云々―仙臺の産物牛蒡は八幡の名産なれば云ふ

伯耆一尋

三河云々―膠、越後明石のちまみ、東寺の瓜、越中輝にかけていへり
色こそ三々―女色は人を留る圓の如し
掛子―苧桶の中蓋

をじやれ―おしやれの意にて出女

どつばさつば―混雜

坊様は、此暖かなに紙子著て仙臺の坊様か。あの旅人は京の八幡の生れやら、足にごんほの毛がむくくじや。向ひ通る菅笠様、足本腰本身のまはり、すつきり奇麗にはいた様なは、伯耆の國の人と見た。是々爰な若衆様、越後衆か明石か鬢かちつくりちどんだ。あれへ大名一かしら、瓜ざね顔の旦那殿、東寺から出た人そふな。跡から御座る角まへ髪、吉野の衆かはなが見事。これへ見へた飛脚の足本のねばいは、三河者に極つたぞ、常陸の衆はおびで知る。是爰な奴殿、越中の國の人と見た。なんで見たれば此下紐をといて一夜は泊らんせ―夕暮は急ぎの人も呼びとむる、色こそ道の關の地藏、しろこ屋の左次が内、小まん小女郎小よしとて百廿里の名取ども、人よぶかた手の袖の下、おごけの掛子そころには、戀に心をひねり苧の、麻棒みだいた胸の中、何とならそのうき身ぞや。小萬なふ小よし小女郎、かふした勤めさまふあれ共、君傾城と云ふ者は此るいで、の王さま。それから段々有内に、をじやれの身には何が成。朝の夜から見世ざらし、晝休みから泊りまで、吉原雀のなく様に、息の有たけしやべつて、それとも泊りどあることか。如何した事やら此比は、一ぜん盛の客さへない。隣にはあの様に大名のお姫様、今日で三日の逗留、宵朝百六十人、どつばさつばと忙がしい。これの内はいかな事。下

角にまた一角に
股が出来る

七二合すれば
九となぬ故九郎
助の渾名にした
り
おやろー追ふて
あろう

ほでてんご一癖
用のいたづら
四九一逃る事の
符牒か
いとしかーいと
しくば

宿さへ泊りが無い晩にはみんな覺悟しや。旦那殿のにがい顔、日比はへた角にまたが咲ふぞ、なふこはや。常にひいきな馬子衆も、こんな時に客ひいて呉そな物ではないかいの。ヤそれについて小女郎、そなたのおてき松坂の七二は何として見へぬぞ。口舌でもしやつたか。梯子の下のごそくが過ぎて氣色でも悪いか。餘りごそくごそついで、馬は追ひでおとがひで、蠅おやろぞや」と云ひければ、小玄ム、其七二とは九郎助のことか。それは未生以前で今は挨拶きりぐす、しいと云ふ馬追聲も聞ぬはいの。始はたんと可愛ふて、元結の脚絆の鬢付買ふの帯買ふの、沓の錢までつどけた、其わしが目をぬいて、一人か二人かみな口の火なは屋のおけん、まだ土山のくし屋後家、庄野のふとのおよねが、たはら腰にくひ付て、馴染のおれをすほんぬきに逢せた。それも云ふたら止むにもせい、ほでてんごうの貧乏神、何もかもほつきあけ、今は布子と襦袢と、たつた二枚の四九をやつて、親方の駄賃の算用も立ぬけな。きけば小まんの知音の與作も博奕の友じやけな。與作がいとしか異見しや。小よしも取沙汰きよやらふ」と云へば、小よし小聲に成、「さればうちの旦那が龜山の間屋で聞いて来て、これの小まんが念比する馬方の與作めは、博奕打の大將じや。あれから盗みの下地じや。重ねて来たともあしら

しよざいー身分

あだてー目あて

鶴のあはれー鶴が粟を拾ふ様にボツくと

まめしげー頼母

しげー

本小むろー追分

ひんぬきー上手扱も見事な云々

若縁巻四にあら

ふな。餘程彼奴に懸も有。丸裸にして成共、懸を取てそれからは、門詰も踏せまいと夫婦さよやきうなづきて、寄合にいかんした」と語もあへぬに、小まんはらく涙にて、「勤めの身にもおじやれの身は、下の下といふは爰のこと。傍輩衆へもいはなんだ、横田村の父様二石二斗の未進につまり、六十六で水牢。男にも娘にも、子とては此身計なり。しよざいこそ出女なれ、お大名へも知られた關の小まんが父親を、水牢では殺されず、参宮するとて隙もらひ、女子の身で代官所を秋納め迄請合て、牢を出しは出したれ共、何をあだてに何とせふ。まへの様に客は勤めず、私仕事に賃草うみ、女中とまりの袖の下、小まんといふ名ではつくと、鶴のあはれや淺ましや、請合の日は近付、氣がいさまねば身もやせて、辛苦するのまあ人の、身をもくろめて遣りたいの念力一つで立る身が、世間でわるふ謠はれて、まめしげもなき浮世や」と、おごけにひれふし歎きしが「あれくあそこへ謠ふて来る本小むろのひんぬきは、興作く」と小手まねき、駭扱も見事なソソレハおつどら馬や、七つ蒲團にソソレハ曲衆据へて「我もむかしは乗りし身を、人は夫とも白子屋の見世さきに馬引付、興こりや小まん、此旦那殿馳走してとめましや。お供かけて三人じや。サア下さつしやれ」と荷物とく。小女郎小よし取々に「そ

けんねじ一筆の
勝負松屋筆記
ついである一打
てゐる
してやつた一儲
けた

梅の木一梅の木
の辻と埋めに掛
く
ぜさい一是齋と
いふ藥種屋

れお足の湯。先奥へ。合宿もござりませぬ、ひろく御休なされませ」と、奥にともなひ
入にけり。興作は荷物も跡付もそこくくに投おろし、「小まん此中途はなんだ無事で嬉し
い、やがて逢はふ」と、馬の口取り駈出す、手綱に縋つて、小萬「これなんぞ。語る事が
たんとある、此方も云ふ事有筈じや。そはくせずと待んせ」と引戻せば、興「エ、じや
まな、其話はいつでも成。急な事じや遣つてくれ」と、振りければ抱とめて、小萬「是ど
ふぞいの、何がそれ程忙がしい。どふで心に一物有、譯を聞ねば遣りはせぬ」と、見世に
とんと抱きすへられ、興「ハテ荷物さへおろしたに一もつが有ものか。氣遣ひそふなに短
ふ咄して聞せふ。此不仕合を聞てたも。傍輩共がけんねじついで錢儲する羨ましさ。勢
多の久三がどうの時、百切はつて見たれば、勝程にくく一いきに七百。こりや門出が面
白いと腰にひつ付、しやんぐくと鈴鹿で皆ついて居る。爰えもちよつと出かけて、又
六百してやつた。是でおけばよい物を、慾には見へぬ目川村の、馬子共よせて我らがど
うを取たの。當らぬかく、晝さがりから七つ迄、一文と六文の錢のかほを見ぬ程に、
前の勝をぶちこんで五百余りのしすごし。どつこいどこぞで此損を梅の木のぜさいの辻
で、身を粉にはたいてやつて見た。和中さんでもきくにこそ、金になをいて一步二朱の

九十九文一深草
少將の九十九夜
にかく

三十三夕一観音
の三十三身をよ
せたり

二月をどる一
月に二月分の利
をとる

ぶろく一ゆす
り者、蜂の鳴聲
にかく

むして一倍にし

借錢おほて、肩の重たい石部の八藏に請合てもらふた。是をいくさの始として、大津八町で八百まける。小野の宿の小町塚で九十九文してやらるよ。すりはり峠の氣が細ふては勝れぬと、へそ村の上で分別しかへ、森山の観音堂で卅三匁が質をいて、心は鬼神と出たれども、つち山の田村堂で、つい平けてのけらるよ。伊勢へ通しにいつた時、宵からあかつきの明星が茶屋で、飲み干す様な大ぐさり。借錢の利を一月に、二月おどる松坂こへて、くも津の渡して算用したれば、貳貫つよ四つ合せて、二四が八藏めに八貫のしやく錢、是はならぬと思ふ所へ、向ふから馬追ふてうせをる。じたい八めはぶろくなり、己が胸倉しつかと取て、「こりや貸した錢はどふする。見忘れたか八じやく」と刺す様に云ひおる。ぐどくと見苦しう詫言もして居られず、「錢と云ふて今はない。正味でかつた錢ではなし。數計の勝負づく、一ばん切について見て、八貫を濟すか十六貫おほ物か。サア來い」と云ふたれば、八めは數年の通りもの「こちは八貫出して置く、負ればそれで取り遣りなし。勝てばむして十六貫なんで濟す合點じや。抵當もなふてはいやじや」と云ふ、此方も引れぬ云ひがより、「是此馬を知つたか、池鯉鮒の市で九兩一分。親方の物なれど十六貫のかはりに、五百目の馬なら。してこい」と、木蔭へよつて錢にぎり、

まつかせ云々
ヨシキタと手を
開けた
しおつた―甘く
やつた
一文はねて云々
―欄んだ錢は七
文と思つたから
の十三字を上
に添へて見るべし
げんなり―グ
ンニヤリと弱る

わりない―隔て
ない

未進―租税慰納
吉書―告發狀

「サアどふじや」といふたれば「三まいせい七つじや」と二文張おつた。まつかせとつく程に、手の内に残つたはたしか七文、南無三寶しおつた。一文はねて六文にして。當てとらふと思ふて一文しやんとくろめて、ついて見たればかなしやの八文で有た物。一文はねて七つにして、彼奴が壺へあてがふたは、どふした因果のかたまり。此方けんなりと成程八めはいきつて「馬を取た」としがみ付。今日の乗手は氏神、やくそくの馬次迄やれくとせがまるよ。八めも武士をのせたれば、なぜ馬を追ぬと目のぬける程しかられて、「久保田で旦那をおろして、追付馬を取に行」と早おひ程に追て来る。親方の馬をとられては、此海道は云ふに及ばず、木曾海道中仙道、たよすみが叶はぬ。八藏めが來ぬうちに、早ふ内へ往にたい」と溜息ついで語りける。小まん心もくらやみにて、「人の沙汰に違ひはない。世につれるとは云ひながら、卑しい心にならんした。古はおれきく、私等ふぜいは下司にもお羨ひなされまい。縁なればこそ膺ふれて、抱つしめつのわりないこと、嬉しいやら悲しいやら、一ばいいとしさ増す物を、わるい病がつきました。そりや雲介の身持ぞや。友達仲間の交際で、引れぬ事があるにもせい、私が親の未進米、此六日の吉書に立ねばもとの水牢、此世から八かんの地獄へおとす私が心、苦にかけふではなけれ

きよくがない！
情ない

ほんのくぼ―運

出入―入賃

ども、案じてもくだんせず、しこり博奕のわる遊び、扱もつれない氣と思へば、まつい涙がこぼるよ」とせき上り泣ければ、與作「わつ」と泣出し、「そりやきよくがないく、慰みにも慾にもせぬ。其方の親の未進米、二石二斗は何程じや、むかし與作が草履取馬取の切米。是で可愛いそなたが親を殺させはせまいと、瘦我をはつての出來心。千三百石から馬追まで成下るほんのくぼ、よい事はなほ咎と、思はなんだは身が不覺。是は主の天罰とあきらめて濟すが、しこり博奕の榮耀とは、去りとは小まんむごいぞや。皆是そなたの親のため、胸に書付有ならば、爰が立わり見せたい」と、打たよいたる胸當も、しほる計の恨み泣。小まん是はと手を合せ、「忝けなふござんする。とふに云ふてくだんせば、恨むまい物堪忍して下さんせ。父様の出入も、夏の物共人手に渡し、傍輩にも無心云ひ百三十匁とよのへ、まちつとの所は賃苧もよつほどうみためた。これ見さんせ」と苧桶より金取出し、「父様の命代、落付てくださんせ。日が暮て間が有、よもや八も來をるまい。泊りどはなし私も隙、馬は向ひに繋いで中の間に寝ていなんせ。互の髪を散ぜふ」と草鞋の紐とく所へ、石部の八藏きよろく目して來りしが、ハヤア與作か人の馬をことはりなしに。美濃路まで隠れもないひぬかの八藏、目のあらひ男知らぬかい。十

すないやい云々
 するな畜生
 奴、はてつばら
 は馬方の例の套
 語
 したかせいし
 たくばせよ
 引さかれ、ふり
 ばりめ何れも
 畜生阿魔と云ふ
 に同じ

くはしたーなぐ
 つた

六貫をたどせふや、どうすりめ」と、馬をとく手を飛かより、ねぢ上て、奥「こりややい、我がひぬかの八藏なれば己は丹波與作じや。二百めのかたに五百目の馬をほしいか。遣たら機嫌がよからふな、三百目のつりを持て来い。五十三次に汁かけて、かみこなす與作じや。すないやいくほてつばらめ」と振りぎる。ハ「ヤイ男達はおいてくれ、錢濟いでしたかせい。腕づくならサア来い」とぶつてかゝれば、小まん取付「なふ八藏殿、こなたは粹の様にもない。其方も此方も親方持、馬をやつて能からふか、取てこなたを褒ふか。聲高に云はず共、了簡づくがよいわいの。情なや」と泣ければ、ハ「ヤイ爰な引さかれ、其涙は與作になけ、こちや忝ふないわい。取べき錢はとらずに馬を取が了簡じや」小萬いやそりや成らぬ。此門に繫いだ馬は此小まんがやらぬ、關の小まんがやらぬぞ」ハ「イヤ死ぬめらうのふりばりめ、竹のぶちをくらふなよ」小萬「チ、女子を相手にならばしや」ハ「ヤア仕かねふか」と鞭を持ってはたとぶつ。與作小まんを押退けて、「あれは餘所の奉公人なせくはした」ハ「チ、我女房じや所でくらはした」奥「ム、よふくらはした、女房共の返禮」と、拳をかためて目鼻の間、缺けてのけと打たりけり。ハ「来い、する氣なら仕て見せふ」と、互にこづかを取ては投つ投られつ、ぶつよぶたれつ攢み合、誠

馬さし問屋上り命ぜられて馬の割當を司るもの
五器云々―飯の種をあげる
男は當つて云々―衝突の後に和解せよ

十三云々―十三
夕と太綿とをか
けたり

おひながら―借
りながら

に馬子の喧嘩とて馬のふみあふごとくなり。八藏は力ばかり、與作は取手柔術取、すりちがひに小腕を取、こぶらを蹴かへし、與「これやあ」ととつて投つくる。門柱に腰骨うち、よろつきながら睨みつけ、八「どうすりめ覺えてけつかれ。問屋馬さし親方へことはつて、海道筋の五器の實をぶちあけ、蕪かつがせて見せふす」と、身を捻振つて立歸る。小まん追付「是八藏殿、公用勤める馬方が、馬さし問屋へことはられ何處で身が立物ぞ。此小まんが手を合せる、男は當つてくだけいじや、堪忍して下され」と詫る程なをつき上り、八「十六貫と云ふ錢貸して、其上に投られて堪忍したら、其方はよかる己がわるい。與作めの博奕うちぬす人と、此門からわめいて往く」小萬「なふ是々爰に百卅匁、命がはりの金なれども、男のためじや惜うない。是で濟して下され」と、取出すを引たくり、八「必跡もすませよ。錢の直段はどふせふぞ」小萬「ハアテそこらは構はぬ、そなたの勝手にしたても」八「そんなら是で拾貫分、相場は十三もめん巾著、捻こんでこそ歸りける。小まんは小首傾ぶけ溜息ついて立歸り、「さきの金を渡してやうくと去せた。彼等との交際重ねておいてもらひたい」と、つぶやけば與作肝をつぶし、「其金渡してよい物か。取かやそう」と立あがる。小萬「是待しやんせ。人の物おひながら、返さいでよいかいの。

昔とちがふて當代は、道中筋も吟味つよく、馬借問屋へことはられ、悪名が立ては、とんとんとすたつて出入の門もふさがれば、おのづから逢ふ事も成らぬ様に成はて、萬一お國へ聞へての恥辱は二度返らぬ。父様の未進も云ひ延る丈云ひのべて、叶はずは水牢へ、代りに私が入覺悟。差當つた男の難義、すくへば私が本望」と、云へども與作聞入らず、「馬方風情になんの恥辱。うき身やつすは親のため。其金をやる物か」と、駈出しが「南無三寶」こりやならぬ。是の旦那の左次殿が、何事が出来たやら、問屋組中つれだちそれ其處へ戻らるよ。何の彼のがやかましい、一寸かくれて逢ひともない。馬も何處ぞへ引てくれ」と、隣の見世の幕のかけ、乗物あるを幸に、戸を明片足ふみこめば、内より「あいたあいたしこ。横腹をふみくさる何者じや」と、小丁稚が大欠してによつと出る。與、ヤア石部のじねんじよか「三、與作殿か」與、そちは爰に何して居る「三、おりや江戸へ通しの馬追ふて本陣に泊るが、夕飯過から眠たふて爰でぐつとやつた物。あり様はこりや何事じや」與、いや氣遣ひな事ではない。隣の旦那に逢ひ共ない、爰へ隠してくれ」といへば、三吉透りをすかし見て、「其所なほ小まんか、エ、くうまひなく。己やとふから知つて居る。外の人なりやならぬが、與作と云ふ名で愛しい。與作の事なら引は

引はせぬ一口を
引かず何處迄も
や名

いあうじー女房、原本に「わらし」とありおかたーおかみさん

出籠ー出獄

ちとまし事ーいやな事

かもめじりにーまんべんに半がいー葛籠

菫蕪の云々ー菫蕪は腹中の砂を

せぬ隠してやらふ、サアはひりや」と膝おし合し心ざし、知らねど親の孝行の通ずる念こそ哀なれ。程なく亭主門口から、「内外の者共皆おきよ。問屋殿庄屋殿組中残らず御座つた。かよも起て出やく」と、わめく聲に出女共、いわうじ諸共表に出る。庄屋問屋口をそろへ、「おかたお聞やれ。今日の寄合は、是の小まんに付て代官所のお差紙、小まんが父親横田の彦兵衛、四年此かた二石二斗の御未進にて、水牢に入られたを、小まんが願ひ請負ゆへ、出籠仰付られた。宿中としてきつと取立納めませいと、則小まんとお預ケじや。よふお聞やれ」と云ひ渡す。小まんうつむき涙くむ。女房も驚きて、「おとましい事仕出しやつて、主に厄介かけやるか」といへば亭主とがり聲、「なんの主の厄介一文もこちや知らぬ。上り下りの旅人衆も關の小まんといふ名にはちて、百やる人も二百やる。一匁の囉ひもかもめじりに取る。百目や二兩は半年にもたまれども、與作といふ博奕打のぬす人めに、有たけこたけ仕揚て、夏の物は半がいに襦袢が一枚なさそふな。與作が懸がよつほど有、皆をのれが請合じや。帳面は忘れぬ旅籠が六かたけ、酒が四升五合、十文もりが七十杯、芋とくじらの煮賣が八十五杯、くらじも食ふた菫蕪の田樂を百五十串、菫蕪の錢じやとて砂にしてすはせふか。盗人におひなれば、此出入はこち

除く効ある故い
ふはせふーすま
せうの意か
盗人におひー盗
人に追録
時宜一挨拶

くもに汁一希望
が生じて来た
のぼすーもだて
る

や知らぬ。與作めが身の皮はいでも二石二斗が物はない。馬を質におさへて彼奴にきつと濟まさせ、小まんを内へ入ておきや。皆御太儀でござる」と、時宜もそこへ戸を立て錠さす音こそきびしけれ。庄屋問屋組がしら、「扱々與作と云ふ奴は存の外の大食、旅籠から盛切から、蒟蒻くふて煮賣食て、其間に小まんと云ふお山を夜食に食をる」と、めんく宿にぞ歸りける。與作は肌冷汗ながし、漸這い出くるよの節穴、しとみの隙間のぞけくど見へばこそ。竹櫛子の出格子に首を伸して取付ば、内より顔がによつと出る。ちやつとひけば、「ア、大事ないく。コレ私じや」與「小まんか」小萬與作様が、今のを聞てくだんせ。悲しいことに成はて籠の鳥に成ました。私がかう成上は父様へ難義はもふかよらぬ。こな様にあふ事はならふやら成まいやら、是が別れに成ふやら、下から上ははかられぬ」と、手に取付て泣ければ、與「イヤ是くもにするが出来てきた。どふした縁やら三吉めが、與作といふ名にほれて、常に己を大事にする。乗物の内てたらしこみ、隣にとまつた大名の、金を盗んでくれまいか、男と見こんで頼む、とのほせば此奴がのほされて成程盗んでくれふといふ。なれば上々ならねば元々」云もあへぬに小萬「いやくく、人迄罪におとす事止にして下さんせ」與「ハテ氣の細い、あらはれ

打たる、分一袋
三吉に向つて彌
頼んだといふ也
げんこ取一代價
五文の餅

そやされーおだ
てられ

きやくーひや
ひや
だくほくー凸凹

て彼奴が打ると分。三吉彌たのんだ、ひかせはせぬ」といひければ、三はれやれやれやれくしちくどい。盗んでいらすは捨やいの。此じねんじよが頼まれて引はせぬ。ハテ親はなし一門なし、けんこ取より小さい首、意氣づくなら取ていけ。盗みして現はれ首きらるよが不思議か」と、義を立ぬきし侍氣、盗む小金もくちせざる筋目恥かし哀なり。興ヲ、頼母しい、命掛けて頼んだ」とありたけそやされ、三ハテイ味方があれば氣が
おくれる、何處ぞへとつと退いて居や。ヤア小まん女郎此守が預けたい」小萬ハテ守は
かけて居やいの「三いやく是には私が本名が書いて有。若しあらはれて捕まへられ、
人に見せれば恥辱じや」と、といて預けし神妙さ。裾ねぢからけて忍び入。興坂の下の
彌六が方へ退いてゐて、夜中時分に戻らふ。小まんもはいりや」小萬私やあぶなふてき
やくする。南無地藏様く」興エ、今願立がきく物か。聲が高いひそかにく」ひそ
ひそと、胸はだくくだくほくの坂の下へと別れける。武家は道中おきてにて、半時が
はりの拍子木の、數も九つ十に余るやあまらずの、子共心の愚かさは、盗みおほせし嬢
しさに、拍子木を除もせず、金襴の財布さけながら、門口へすつと出る。夜廻りちらり
と氣を付て、慕ひ寄ればうろたへて、乗物に逃入つて、内より戸をぞさいたりける。夜

地獄落云々一鼠
落し強つた鼠の
櫓
ちぎり木一乳迄
の長さの櫓

るくて一無難で
はつつけ柱一礎
柱にて罵る詞
枝骨一手足

廻りつゝいて飛付、乗物の戸をしつかと押へ、すだれを揚て「ヤアうぬめか。是は御前のお金袋。サア馬方の三吉めがお金袋を盗んだ、出あへく」と呼はりし。是ぞ此世の地獄おとし、かよる鼠の如くなり。本陣の上下残りなく、下宿の諸侍、隣町隣家の旅籠屋ども棒ちぎり木にて断付、海道の真中に乗物かきすへ高提灯、あたりきびしく取巻たり。當番下知して、「丁稚づれに仰山なそれ引出せ」畏まつた」とあらしこ共戸を明て、「サア出ませい」と小腕取て引出す。三是旦那殿ぬすんだ金は返します」と、きよろりとしてぞ居たりける。鶯いか様にも幼少な。彼奴計ではあるまい、同類を穿鑿せん。馬さしは居らぬか、當宿に泊つたる馬子共残らず召よせよ「あい」といふより觸れまはり、皆々一所に相つむる。八藏も大酒して宵より關に泊りしが、「盗みかかはくは何奴じやい、ヤアませのじねんじよめか。おのれなら尤、ろくで果てまい奴じやと、常にいふたが遠ふたか。馬方仲間の恥さらし。エ、はつよけ柱め」と、脊骨をどうと踏みければ、俯にかつばと伏し、額を石にすり破り血は紅と流れたり。三無念な己れ踏んだか枝骨もいでくれふ」と、立上ればひつすへく、鶯、そこな馬子めも慮外者、武士の前にて脛さんまい」ととさんくくに吐らるよ。三エ、彼奴にふまれたか。下々の刀でさへ切られまいと

さもししー早し

思ふに、脛にかけて此様に、顔に疵を付たなあ。首がとんだらをのれが面へ喰付てくれ
ふぞ」と、はつたと睨む目の中に無念涙をはらくと、思ひこんだる腹立の、おさな心
の念力は、ぞつと身の毛も立にけり。母お乳の人聞付て、駈出見れば大勢に取圍まれし
我子の躰、あつと計に腰もぬけ、あきれて泣よ、外はなし。人々に悟られては、今まで
包みし甲斐もなく、お姫様の乳兄弟、馬方して盗みしてといはれんも口惜く、不使さ憎
さ腹立さ。蕪ヤイそちは國から目をかけて、情を加へた甲斐もないさもししい事を仕出し
たな。筋目も有そな者なれ共、さすが育が恥しい。其心ゆへ親々も知ても知ぬ見ぬ顔し
て、其馬方とは成つらめ。此方も子を持ち覺が有、皆親心は同じこと。若母などが聞付て
も、我子の命を助けたため、火水の底へは沈まふが、此場へ助けに出らるゝ物か。見殺
しにする様なれど、心の中では神佛に命ごひしてもがくぞや。年にもたらぬ心から、恐
ろしい事する筈もない、父親が貧しうて、云付て盗ましたか、但は人に頼まれたか、云
譯あらば仕てくれよ。母の心を推量し、此比の馴染も有、兎に角命が助けたい。姫様の
お名を思はずは此のお乳がうんだ子で、姫様の乳兄弟と云ふて成とも助けたい。どふ成
とかふ成と云譯あらば仕てくれ」と、魂のそこ心のそこ、肝より出るうき涙、當番吟味

の人々に推量もしてくれかしの、心遣ひ目遣ひをそれ共知らぬぞ是非もなき、三吉も母の顔、見上見おろし涙にむせび居たりしが、三申お乳様さもし盗みいたしても、馬方のことなれば誰恥かとは存せぬ共、お前一人に恥かしい。父様のためかとは恨めしの仰やな。父様が有程なれば馬追は致さぬ共、あり所知らねば顔も見ず。又母様も持たれ共、女子の身の不甲斐なさ、奉公人のはかなさは今では他人も同じ事。たとへ云譯立てから、盗人の名を取り見苦しいめにあふては、父様に顔はむけられぬ。はやふ殺してもらひたい。其様におつしやれて、可愛がつてくださる程どふやら心がうろたへて、死ともなふ成そふな。奥へ入て下され、もふ顔見せて下さるな」と、兩袖を目にあてよ泣しづみたる利發さに、母はなをしも心くれ、「命はお乳が囉ふた、助けて下され侍衆」と、わつとひれ伏し聲を上、人の推量思はくも忘れはてよぞ泣居たり。家老の本田奥より出で「様子つぶさに承る。盗み物出ると云ひ、殊に道中他領の者、是式の事評議に及ばず、お助なさるゝ立歸れ」と、引立れば三吉、「此恥かいて助られ、何と生てゐられふ。慈悲なら切て囉はふ」と、猶座をせめて立ざりし。本エ、小しやく者かるい科を成敗とは、古今の掟にない事。立て失せふ」と怒らると、三ム、此分ではどふでも命助かるの。ヲ

成敗―死罪

是式―是位

めたくくーまた
くくなるべし

泣入―無くにか

往がけの駄賃―
行がけに頼まれ
た駄賃は馬子の
儲
はてつばら―太
腹にて馬を罵る
詞

仕損ふたげなの
ふ―仕損ふたら
しいニア

ヲ聞えた」とつとと立「こりや八藏め、おのれは己をよふ踏で面に疵を付たな。元來我
は武士の子じや。人に踏れて生ては居ぬ、覺えたか」と云ふ詞のうち、中間が脇指ひら
りとぬき、飛びかよつて八藏が首打落せし早業は、めたくく間の稻妻なり。「すは人殺し」
と取て伏せ、「もふ此うへは了簡なし」と、本繩に縛りあげ、「宿の庄屋へ預けをく。此方よ
りも人を付代官所へ渡すべし。立あがれ」と引立つ。母は性根も泣入て、前後もわかす
みだるれど、「此お日出度道中に繩付などは見ぬ物」と、人にさそはれ力なく見返りく
奥に入。子は又母を見送りて顔をうなだれ目をふさぎ、聲をも立す歎きしが、三ム、是
ぞ本望く。悪名取て人には踏まれ、幼けられても生きて居ぬ。一人死より人きれば往
がけの駄賃じや。父様も母様も誰も一度は死る物、來世でゆるりと逢はふ迄。あの世か
ら來てあの世へ歸る。戻り馬やろいほてつばらめ」とわるびれぬ、所存は侍まさりか
な。忝惜い奴じや」と涙ぐみ、引て歸れば本陣は火の用心の聲ばかり、物しづかにぞ成
にける。與作は取沙汰聞とひとしく、科を我身に引うけんと、駈つけ見れども早落著し
てひそかなり。本陣も門しまり、四邊もひつそと静まつたり。小まん待かね格子たよけ
ば走りより、與どふじやく仕損ふたげなのふ」小萬ア、仕損ふただんかいの。私や爰

仕揃ふただんか
いの失敗以上の
失敗

選人一罪つくり

左繩一不運

もじやく云々
いらんな事い
へば氣がひける

できた一出かし
た

往還一大道

から覗いた、八藏まで殺いたはありや皆私等が身替り。明日の日に中切るよけな可愛ひ
事を仕まする」と泣きよやけば、奥南無阿彌陀く、そりや皆こちが殺すは。こちとは
いかひ業人」と顔を見あはせ泣居たり。小萬なふ三吉より一時も跡に下つて成まいが、
こなさんどふ思ふてぞ」奥ム、其覺悟きはまればもふ落付た満足した。宵からそふは思
ふたが親仁の難義を見捨ては、死なぬ氣で有ふかと胸に計持て居た。心がよりは残らぬ
の」小萬ハテこふ左なはに成からは父様の事も埒あかぬ。もじやく云へば氣がもどる。
餘のことおいてサア早ふこゝが出たふござんする」奥ヲ、嬉しいく。裏の軒につない
だ、馬を人手へ渡しては主たる人への不調法、死場へ馬も引まいか。其間に身を出る程
此竹格子をはなして見や」小萬いや此も小よしの悪性で、つい推ばはなれる」奥ア、ア
ア小よしは逢ふ夜の通ひまど、最期近付二人には冥土に通ふ鐵の門」と、くどきく馬
引出し、「預けて置た脇指は」小萬そこらはぬからぬ私が腰にさいて居る」奥できた。夫
なら此馬の鞍をふまへてそつと下や。ア、あぶないぞ怪我すな」と、かははると身もか
ばふ身もはつる廿日の月毛の駒の、尾髪亂れて置露に袖の涙をあらそひし。ひらりと飛
おり一冊計足ばやに立退き、奥海道は往還、伊勢路の方で死ぬまいか」小萬ア、それ

淨線段—淨繼の
續の總名（貞丈
雜記）

もきめ—刑罰—

腰折云々—まづ
三十一字の歌
と腰抜た與作の
三十一歳とかけ
たり

に付て待たしやんせ。三吉が預けし守袋、いか成神の御札やら、私が懐中にも太神宮の
守お祓ひ、穢すは後生のさほりなり、地藏堂へ納めませふ」與、チ、氣が付た」と取出す
ふせんりやうに紅梅裏の袋を開き、月影に讀んで見れば、「正一位おばら太神宮、丹波の
國の住人伊達の與作が、一子與之介息才延命」與、南無三寶、扱は三つで別れたる我子の與
之介成けるか。我を親とは知らね共、與作と云名を大切に、慕ひし物を氣もつかず盗を
させておきめにあふ、手を出して我子の首を切たと同じ事よ」とて、とんと坐して足す
りし、聲を上てぞ歎ける。女も共に涙にくれ、「因果人共ごう人ともよふもく、罪業を、
重ねたは二人が身、死なふと云氣の付たこそまだも冥加に叶ふたれ。何のかのと暫時で
も、此世に居る程罪おもし。サアござれ」與、チ、そふじや」と、立んとすれど腰立す「口
惜や腰ぬけた」小萬、エ、氣のよはい」と引立れ共膝おると。抱上ても腰をれの三十一期
の浮思ひ、最期は伊勢路育は近江、生れは丹波くりけ馬、夫を抱きかき乗せて、妻は口
取はいどうく、今六道の次傳馬、三途の川を打またぎ、昔の小歌引かへて、あひの土
山死出の山、冥途の旅路通し馬、たどるや夢の 三重

與作小まん夢路の駒 下之卷

與作丹波の、與作思へば―右二首は諸國益師唱歌但馬七にあり
 稻負鳥―鶺鴒、爰は馬と見ていふ(比古漱衣)

中有―七七日冥途に迷ふ事

馬羊―屠所の羊を含めたり
 泣て―無いにか
 拔參宮―親主人の許しを得ずして伊勢參宮するそなた榎田云々

歌「與作丹波の馬追なれど、今は野すへの放れ駒じや。しやんとさせ與作。與作思へば照る日も曇る、關の小まんが涙雨か。しやんとさせ與作」よさくくと、呼びよばれつる、いなおほせ鳥も音をいれて、野邊のかるかや軒ばの荻、馬のまぐさにかひ残す、草も我身も此あか月は、ともに枯野のくつはむし、人を乗せたが乗せられて、かぎりの旅の坂の下、なふあれ、夜ぶかに急ぐのりかけも、泊りは知れて四日市、我は泊りもなよ七日、中有の旅の馬ひつじ、歩めしるく、ア、しぶとい口を、引どしやくれど行きかぬる。畜類ながら性あれば、最期を惜む綱すくみかや。歌「私は十二で人よび初めて、今年廿一まる九年、とめし旅人何萬人ぞ。關一宿はせばけれど、男女に幾人か、とものよしみも時の花、無常のかぜにちりはてよ、馬より外にとふ人も、泣てくれるか優しや」と、鞍にひれ伏しはらくと、袖には涙梢には、このみこほると棕本や。與「契り初しはさをとよし、拔參宮の道づれに、歌そなた榎田の真中ほどで、深き思ひをやれ紫ほうし、ほんに口説いた其眞實が、關の地藏を誓にかけて、戀の重荷の馬追ふ迎も、足もかるく

—此頃松の落葉
五巻にあり

とよくの—地名
とゆたかに出く

頼しみ—絶みに
かく

輪漣云々—地名
をかけて二世三

世もと取交す

あこぎにも—只
管に

石塔—自分の墓
と見立て、いふ

朝熊織—伊勢の
南にあり

男見る目云々—
男見る自分の目

は涙計り

心もひろき とよく野とこそ頼しみし、あかれぬ中を秋の霜今宵切ぞと氣もへりて、久

保田に浮名うづむかや」サイモン小まんなく、ヨイ申様、「縁は異なる物其時に、起請一

枚書ね共、くもづのかはせ二世三世、指切しての云ひかはせ、枕定めぬ夢宮に、寢て居

て胸をやかふより、手を引あふてゆるくと、歩みなぐさむ夕暮は、一わの火繩に火を

付て、相合ぎせる思ひ草、思ひし甲斐も夏のせみ、春秋知らぬ世のたとへ、與作小まん

が身の上と、昔忍ぶの露涙、今を恨のうき歎き、このもかのものにあのよもの、あのよ松

原時雨行く、阿漣の海士の、あこぎにも、過にし方を思ひ出で、二見の浦の二つ石、清

めし肌引かへて、刃に穢し死する身の、かたみとなれや石塔の、標の石を思ひ出す。

いがき越へしも戀のつみ、末社くの宮めぐり、地獄めぐりを思ひ出す。返らぬ昔思ふ

まい。泣なくと鳴鳥、人の末期を知らすとは、音にきよしが今ぞ知る、あさぐまの嶽

浅ましや。彼のさいぐうの忌詞、いまはしや辻道もせに、晒す身體を道者にも、嫌ひ憎

まれ人々の、よもや回向もなさけなや。歌過去もエイ未來も現世で知る」と、男見る目

は泣目もと、ヤツサありやそりや、早明がたのお八つの太鼓の聲は高田の寺、泊りく

は多く共、十萬億土馬次なしの、西は百味の旅籠屋に、観音せいし手を取て、蓮の臺に

泊らんせ。夫婦の外はあひ宿も南無阿彌陀佛彌陀佛と、ここの阿彌陀の影たのむ、其誓願の詞の縁、千貫松にぞ三重著にける。

さはりすはりか

生死を云々此世を去つて未來成佛する
さみせられ悔られ

與作も名有弓取の、家に生れし氣質とて、きつと死に身に胴さはり、土手へ飛おり馬を小松の根につなぎ、小笹の露を打拂ひ、「爰へく」と小まんが手を取顔を眺め、「廿一と卅一、二人合せて五十二才、是でから長命と云ふ程の年でもなし。可愛人を殺すよなふ心にかよりいひたいことは、ないかく」といひければ、小萬ハテかはいひ男と死ぬる身が、浮世に心何残らふ。去ながら只一つ、いふて返らぬ事ながら」と、云んとするを、與ア、もふく、それもいらぬ事、人間の念慮かぎりなく、息の通ふ間は六根の樂欲にひかれ、思ふ程云ふ程なほつきず、皆罪障の種となる。此念をはらふを、生死をはなれ涅槃門に入と云。我とてもいひたいこと千萬無量を打捨たり。され共一ツの粗相には、そなたに預けし箱枕に、先祖の由緒、所々の勤功知行付の一卷有。死後に諸人にさみせられ、家名をながさん此無念、よし夫はまよにもせん、不便やかはいや與之介か、最期迄親共知らず、親戀し父親戀しと思ひ死に殺されん、其思ひは親のわざ、親ではなくて仇ぞ」と、かつばと伏して泣ければ、小萬、それ私には云ふなくとてこな様いふて泣し

壁の限り云々！
泣く壁とよむを
地名にかけたり

太々神樂—太神
官に神樂をあび
て命乞する也

頼外—提灯の
覆を取る

やんす。そんなら私も父様が、年よつて子をさきだて、途方があるまいとしほや」與「ヲ念を残すが迷ひと成。たとへ奈落に沈む共親の事と子の事が、思はず云ずに居られふか」小萬「そふでござる」與「そふじや物」小萬「いつそいふて罪作り、親のため子のために、地獄へ落ちてやりませふ」と、二人ひつしと抱き付、聲の限りをとよくの風も哀を添にけり。與「あれくあれへ見へる早提灯、走り飛脚と覺へたり。道端はいかどなり、いざ最期場を換まいか」と、半町ばかり草わくる。飛脚共は汗水にて、「お乳の人の御立願あす四つ迄に命乞の太々神樂、御願かなへば、御祝義の御褒美は知れたこと。急けく」と走り行く。與「あれ聞やつたか、何方のお乳の人、命乞の御願とは養君の煩か、いらぬ命が二ツ有、ア、換らると物ならば」と、悔めば小まん涙ながら「夫が叶ふ程ならば、よその子よりもこつちの子、切られて死ぬる身替りに、とても死ぬる此身體、髪頭より爪先まで、一分ためしに試されても替りたい助けたい」と、歎しづみし誠の心、百千萬のいのりより、などか祈禱にならざらん。時に人足四五十人ひそめて來りしが、「ヤア主なき馬の夜中といひ、繫がれ有は訝し。提灯立よ」と呼はつて、忍び提灯さやはづせば萬燈會のごとくなり。「遠くはあらず、一二町野をかれ」と大勢が、「與作小まん」と

母儀・麩の井
大殿の御前―殿
様のお目通りす
むまで

聲をかけ、漏る方なく取まきたる。與「南無三寶見付られては二度の恥、いざ死なん」とひらりと抜く、刃物の光、「それやこそ」とお徒士衆、やにはに二人を縋りとめ兩方へ引わくる。與「やれ侍ならば情を知れ。もとは伊達の與作ぞ。一生懸命の時節到來、死損なはせてくれるか。エ、口惜い」と身をもがく。遙か彼方に立てられたる乗物より御意を請、若侍走りより、「ム、珍しい與作、故傍輩驚坂左内見知られつらん。こんど姫君關東御下向御悦びの時節。今夜の始終御れんみん淺からず、吟味仰せ付られしに、小まんが箱より貴殿の實名あらはれ、三吉事も實子與之介にまぎれなく、殊に内室お乳の人神妙の心ざし、かれこれ感じ思し召し、三吉が命を助け母儀もおなじく御供にて、兩人を助けんため、忝けなくもあれ迄お乗物を出された。大殿の御前相濟迄五十人扶持の御合力、小まんもお家へ引取、重ねてよろしく御了簡有べしとの御意の趣有がたふ存じ、サアお乗物のお供して歸られよ」とぞ述にける。與作草むらに頭を付、一大殿以來例なき御厚恩報じ奉る事もなく、不奉公の天罰にてあらぬ體になりくだり、親子も知らず恥辱の骸をさらすべき所、姫君の御愛憐生々世々に忘れ難し。去りながら女共も悴も、人の笑はぬ心ざしも立たるに、拙者は何を面目におめくと諸人に生顔があはされん。傍輩の

人そばへ一人に
連れてするに當
る

乗配―指揮する
に用ふるに

きつすい―尤も
よい者

情に死だ跡と御披露あれ、最期のお暇申し請る。小まんが事はその替りに、頼み存る左内殿」と云ひもあへぬに、小萬是々々此小まんに残れとはお内義様の思召、わたくし計に恥さらせか一人歎けか物思へか。口で云へば人そばへ、先立て埒あけふ」と、取付脇指おし止め、與そふじやく。恩も禮義も忠孝も、死ぬる身にはへちまの皮。爰へよれ南無阿彌陀」と、刺違へんとする所を、左内飛入り脇指もぎ、二人を兩へ踏倒し、はつたと睨んで齒嚙をなし、「イヤ道知らずの人外め。さすが以前は御家中の物主乗配迄御ゆるされ、二つ道具をつかせし身が、心迄上々の馬方になつたよな。諸傍輩多けれども親左近右衛門が忍ほし子、與作と云名を付たれば、此左内と己と兄弟分が口惜い。死なふくとやかましい、死ぬるが左程珍らしいか。弓馬の家の死と云は、城貢の一番乗、野合軍の一番鎧、能敵の首取て討死するを侍の死悪い死とは云ぞ覺えて置け、關の小萬と心中の討死を手柄とは、一切經にも無こと。纒の恥を思はんより、主君の恩を報ぜぬは侍たる身の恥と知ざるか。扱淺ましや後指をさよれふが、犬畜生といはれふが、我身の恥を振り捨、厚恩の主君に忠節をはけむこそ、恥を知つたる侍、大丈夫の武士のきつすいといふ物ぞ。此道理合點なく、死んで勝手がよいならば、左内は止め心任せ。去なが

過分—重疊

ざんざり〜陽
氣に〜ふみ馬云々一人
を踏む馬連れて
脚免〜と進
む、ふみに文を
かく

ら侍ならぬ馬方を刃で死なすは勿躰ない。舌をくふか身を投るか、似合た様に在郷馬の口取綱で首くよれ。情に見物してやらふ。エ、侍でもない者に心を盡して氣がつきた」と、大あくびして居たりける。與作わつと泣出し「誤たり左内殿、此仕合の上なれば、心も闇と罷成。萬事貴殿に任せ置」と、手を合すれば膝立直し、左合點いつたか過分く、それでこそ與作なれ。御前は拙者が受取た」と大音上て、「與作は御意を重んじ生害思ひとどまる由、御披露あれ女中衆」と、よばはれば御乗物、さんざめかいて昇よする。お乳の人も與之介も、さすが武士の子武士の妻、御前なれば手をついて、四人目と目を見合せ「何事も姫君様、御慈悲ゆへ」と計りにて、嬉し涙に咽びける。姫君輿の内ながら、「與作丹波の伊達男と、歌に謠ふはあの人か。關の小まんも雙紙に有繪で見たよりはよい女房、聞ケば踊が上手じやけな。明日は一日逗留せふ。踊を踊つて見せてたも。家老共に云付て知行をたんとやらせふ」と、生れついたる御詞、其一言に千石千兩、千貫松の千代に八千代に、よろづ與作がもろ果報、小まんが戀もとをり町、仕合よしで今はお江戸の刀さしじや。しやんと一筆ふみ馬御免。踊子よする笛つどみ、馬も太鼓をうつくしき、踊り浴衣の上から下迄、いろめき悦び三重賑はへり。

與作おどり

こい染こみ一深
く馴染む

ふづくる一膝を
以て蹴す(色道
大鑑)

せがむ一文をよ
こせと促す

グドヤゑい〜〜〜紺屋の徳兵衛、房にもとよりこいそめこみの、内の身代灰汁でも
剝けず。口入たのみて銀四百目を、かりにやとふて女房と名づけ、阿房三太を、らむう
けん太で、やまけふづくる内義の心、男いともし子もまた可愛。しはい隠居の手前をつ
つみ、宵寝する子を我夫ぞと、いひまけすます鬢かづら、徳兵衛不義じやとはやまるき
ほひ、顔は十めんぐめんもいらす、羽織ひらりとやツ〜この〜我子のこの〜、
胸ぐら取て引ずり出す。宵よりつもるうき涙、理づめ義理づめ情づめ、如才内義の貞女
にめでて、グドヤ金も投げ出し房との中を、あすは神明こよひの月ぞ、思ひ切たと誓言す
れど、こよひちぎりの戀風は、生薑酒でもふせがれず、氣もふは〜の玉子酒、まよよ
行てのきよ、左様も成まいか。どふせふか、かうせうが酒、辻にしよつつくばふて、思
案中橋こひしさまさる、胸かきまはす玉子酒、心ふたつに打ちわつて、君が方へと走り行
く、跡は内義がナ獨寝てさ、房は日くれて人まつ隙の、火廻しすれば飛脚がせがむ。肥
後屋の迎ひはやとく徳兵衛、兄の病氣を見廻顔で、來ても互の心の底は、云ふにいはれ

ふとんと一階
圖、とんと

樽屋町一垂るに
かく
高津一來うにか

ぬおしどりの、たよんとすれば病者のくせの長話し、何とせんきのあら腹いたや、痛や
痛やと空腹痛めど、空さむき夜に是非に泊れとゆふ霜の、おくの炬燵にふとんと轉けて、
泣て忍ぶは隣の二階、そろりく、そろりく、さし足は、傳誰じや房か」房徳様
かいの「これは夢かと抱き付き縋り、憂をさよやき、辛さをくどき、死なでかなはぬ身
のさしづめと、なりゆく果ぞあはれなり。房を背中に大屋根傳ひ、足もよろく夜は何
時ぞ、七つ八つの芝居の仕組、浮名ばかりは残れども、残らぬものは命ぞと、いとど涙
の樽屋町、おりて再び此娑婆へ、いつか高津の日親様で、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮
華經、南無妙法蓮華經、蓮華ひとつと脇指を、胸におしあて只一刀、あつと叫びし一聲
に、づんぶり染の紺屋の徳びやうゑ、お房が頓生菩提の回向、水を手向て再び盆を、重
ね井筒と名のたつにさ。千歳樂萬歳樂、おどりよろこぶ御代ぞたのしき。